
傀儡師の靈界戦争

紅葉or紅蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傀儡師の靈界戦争

【Zコード】

Z7621Y

【作者名】

紅葉〇〇紅蓮

【あらすじ】

自身の祖母、チヨと木の葉の忍であるサクラに曉であつたサソリは破れ、そして死んだ。

…ある時、サソリは目を覚ます。見渡すと、そこは知らない土地であつた。

「俺は死んだはず…」そう考へ込む彼の目の前に、黒装束の者達が立ちふさがり…

プロローグ（前書き）

初めまして、紅葉。・紅蓮です

この小説を読むにあたり、注意事項をいくつか。

まずははじめに、

- ・BLEACHを読みにきた
- ・荒らして、または晒しにきた
- ・誹謗中傷目的

上記にひとつでも当てはまる方、お帰りください（< >）

- ・NARUTO、またはBLEACHが嫌い
- ・主人公の人選ミスってる
- ・作者が嫌いである

この3つにあてはまる方も、出来ればお帰りいただきたいです…

さて、逃げましたか？

では記念すべき（）プロローグです。

દ્વારા

プロローグ

思わず下を見る。

『蠍』（さき）を書かれた自身唯一の生身である場所が、刃物で貫かれていた。

グッと重力が何倍になつて襲い掛かつてきたように体が重く、動かなくなる中で、少年（こども）サソリは首を横に、動かす。

そこにあるのは、己が求めてならなかつた（じ）両親の、顔

ガシャン。

無機質な音が響く。

動けなくなつた自分が、自らの手で作った両親の傀儡（くいりつ）と共に倒れる。

サソリを倒した彼の唯一の肉親であるチヨと木の葉の忍であるサクラが何かを話しているのが聞こえたが、如何せんサソリは聞いてはいなかつた。瞼が重くて、仕方なかつたから。

人形なのに。睡魔なんて、襲つてくるはずがないのに

そう思ったが、眠べてどうでも良くなってしまった。

験をやつべつと下りた。

そのとき、声が聞こえた。

『待つてる。』

『いつまでも待つてる、見守ってるから』

自身が欲しくて堪らなかつた、両親の優しい声が、聞こえたよひな
気がした

『赤砂のサソリ』は、死した。

プロローグ（後書き）

最近知ったんですが、サソリさん生き返るみたいですね。
この小説にちょっとと書きそなん（腰痛みたいに言つた）そこ
らへんは無視しちゃつてください。はい、ごめんなさい。しかも今
回短いっスね。

まあこれから『傀儡師の靈界戦争』（略して向こうみゆう）をよろ
しくお願いします！！

傀儡師と黒装束

両親の傀儡に核を刺され、体が鉛を飲んだように重くなる。

離れ行く意識の中、サソリはまつり、と誰も気づかなければいいの小さな声で呟いた。

『

7

*

意識が、ふわりふわりと浮上する。

朝なのだろうか。麗らかな日差が体中に当たり、ぽかぽかと暖かい。着ている暁の外套に黒を施されているから、余計に。

サソリはかすかに瞼を開き、太陽の光を眩しそうに呑める。

そして一拍置いてから、跳ねるよにがば、と起き上がった。

「俺は…? どうして…?」

(両親の…チヨバアの傀儡に刺されて、死んだはず…なのに)

呆然として自分の手を見つめる。

しかし、だんだんと時間が立つにつれて、サソリの脳は冷静になり始める。

サソリの頭の中に、ひとつだけが浮かんだ。

もしや…? 『死後の世界』とこいつやつなのかもしれない。

それなら少々無理があるが、成る程、合点がいく。サソリは辺りを見回した。

「森か…」

(案外普通なものだな)

見渡して見たものの見たものは木、木、木。奥をよく見てみると木漏れ日が漏れていることがわかるが、案外深い森なのだろう。

そしてサソリが倒れていた場所は、木々が綺麗さっぱり生えてない。広場というところだろうか。

「…ずいぶんと普通なところだな…地獄はもつとひどい場所かと思つてたが」

そう、サソリは「こ」を『地獄』だと思つていた。

サソリの所属していた『暁』^{あかつき}は、各国の抜け忍で構成されたS級犯罪者達による小組織である。サソリも暁の幹部の一人であり、沢山の忍を殺してきた。

だから、逝く場所は『地獄』。自覚もしていたし、ましてや自分が『天国』とやらに逝くなんて事は天と地がひっくり返つてもありえないと思つている。

「こ」が本当に『死後の世界』ならの話だが。

サソリはもう一度自分の体を見る。そして、あることに気がついた。

さつき、田を覚ましたとき。

『麗らかな日差が体中に当たり、ぽかぽかと暖かい。着ている暁の

外套に黒を施されているから、余計に。』

そう、思った。しかしよく考えて見ろ、自分は生身ではない。もつ、人傀儡なのだから。

外套のボタンを急いで外していく。外套がパサリと落ちた。

サソリの目が見開かれる。

「な……

……生身、だと……」

驚きで一瞬固まるサソリだったが、すぐに我に返り、様々なことを確かめていく。

チャクラは使える。

そして壊れたはずのヒルコや三代田風影の傀儡が、傷ひとつない状態で出てきたことにサソリは内心ほっと息を吐いた。

その時だつた。

空気の激しく切れる音。 それも大量に。

サソリは怪訝そうに顔を歪め、ヒルコの中に素早く入る。

入つてすぐヒュ、とこつ空気の切れる音が聞こえて、

目の前に、突然、黒装束を纏つた彼らは現れた。

「丁重にしる、貴様を拘束する」

ちゅうじゅう中心に立っていた男がそつそつと、皆一斉に刀を抜く。

（刀…忍ではない？）

武器がクナイではないことにやつ判断する。勿論忍の使う武器はクナイだけではないのだが。

すると、男が3人、突然サソリサルコの眼前に現れた。

「ツ！」

まるで瞬間移動のように焼き消えては眼前に現れるその素早さに、サソリは驚きを隠せなかつた。が、風の音と砂、草などの動きでどこに来るか把握する。

後ろ2人をヒルコの尾で叩きつけ、前の1人に毒針を仕掛ける。

「があ…ツ…?」

『フン、 もまあなえな。』

そうはき捨てるど、雷光がサソリヒルコを襲つた。

ジユツ

『…?』

『『破道の四、白雷』』

雷光が来た方向をたどると、そこには金髪美女と銀髪の少年がいた。金髪美女は人差し指を伸ばし、こちらに向いている。おそらく、今

の攻撃は彼女の仕業であろう。

他とは違つ白い羽織をした銀髪の少年は、サソリの攻撃で倒れてい
る男達をちらりとみて、眉間に皺を寄せた。そして地を這つような
低い声で、言つ。

「…テメエが、やつたのか？」

『あ、ア？テメエらが先に仕掛けてきたんだろうが。倍返しにして
何の意味がある？』

「…そつか

少年はそつぶやくその言葉を紡ぐ。瞬間、少年の姿は強き消え
る。

「『

霜天に座せ』」

ドスッ、と音がして、少年の声が静かに響く。サソリヒルコが下を向くと、そこに少年の澄んだ翡翠色の瞳があつた。

「『氷輪丸』！！」

少年が叫ぶと、刀の刺さつた傀儡の隙間から大量の水が襲う。サソリはすぐにヒルコを開き、外へ出た。

音もなく地に足を着き、顔を上げると、そこには驚いた彼らの顔。

「な……人の中から人が……」

「子供……！？」

「あの子供が…」

要するにヒルコの中から子供が出てきたことに驚いている、と。

サソリは無表情のままで戦闘体制に入る。

少年と美女はそれを見て、刀を構えなおす。サソリは、指をかすかに、動かした。

ババババババババババババババババツツ

「 つ何！？」

まさか先ほどの人形がまだ動くとは思わなかつたのだろう。少年は驚いた声を上げ、刀をヒルコから発射された毒針に向かって一閃する。

すると、毒針は水に包まれ、瞬く間に凍りついた。

「これにサソリは田を丸くしたが、やがて面白いアーティ田を細めた。

「…へえ…面白い術もあるもんだな。そんな術、はじめて見た」

「　「　「　…」」

サソリは満面の笑みを浮かべ、少年を見つめる。

あの女もそつだつたが、サソリが見たこともない術を使つその体に、
サソリは興味を持った。

少年は田を見開いていたが、すぐにキッとサソリににじみつかる。

「テメエは、旅禍か？それとも破面アランカルか？」

「…旅禍？破面？そんなものは知らねえよ」

「……ひとつ聞きたい、テメエは『生きてる』か？」

「……いや、俺の記憶が正しければ、死んだはずだ。それがなんだ？」

そういうと、少年は美女と目を見合わせる。そしてサソリに顔を向け、刀を下ろした。その顔に、先ほどのような警戒は消えていた。

それにサソリは怪訝な顔をくる。

「……何のつもり？」

「お前に聞きたいことがいくつある。つっこいてほしい」

「……」

黙っているサソリを肯定と察したのが、少年は羽織を翻し、「ついて来い」と言った。美女は怪我を負った仲間（部下だらうか）を運ばせてくる。そしてサソリに近づき、

「『』ねんね~勘違いつぽこわ~」

急にそう言った。突然のことに驚いたサソリは硬直する。

硬直したサソリを面白そうに眺めながら美女は思った。

（『マイシの唄…』）かで聞いたことある『氣がするのよね~』

「ひして、傀儡師と彼ら　死神は出合つた。

いつまで経つても来ないサソリと美女に、少年が「早く来いーー！」と怒鳴り散らしたのは余談である。

傀儡師と黒装束（後書き）

スランプ中です。そしてサソリの口調があまりわからんといつ事実。
(ちょ)

少年と美女…わかりますよね。最初はどうしてもこの一人が動かしやすい。

これからも『傀儡師の靈界戦争』を応援よろしくお願ひします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7621y/>

傀儡師の靈界戦争

2011年11月24日19時50分発行